岡山理科大学紀要　第57号 B pp.31-43（2021）

在台湾日本人留学生の対人行動上の困難と異文化適応
―台湾留学ソーシャルスキル学習の検討－

奥西　有理・田中　共子*・村上　純**

岡山理科大学教育学部中等教育学科
*岡山大学社会文化科学研究科
**株式会社リクルート

(2021年10月31日受付、2021年12月9日受理)

１．はじめに

１－１　研究の背景

日本学生支援機構（JASSO）実施の「2019（令和元）年度日本人学生留学状況調査結果」最新データによると、教育又は研究等を目的として海外の大学等で留学を開始した日本人学生は107,346人にのぼる（日本学生支援機構，2021）。コロナウイルス感染症が2019年度の冬に始まったことの影響で、前年度の2018年度に比して7,800人の減少がみられるが、現代日本人の若者にとって、海外留学は身近な選択肢の一つとなっていると考えられる。2019年度の渡航先に関するデータをみてみると、アメリカ合衆国（18,138人）、オーストラリア（9,594人）、カナダ（9,324人）、韓国（7,235人）、英国（6,718人）、中国（6,184人）、タイ（5,032人）、台湾（4,894人）、フィリピン（4,575）、マレーシア（3,461）と続く。依然として欧米諸国が留学先の上位を占めているが、アジア諸国への留学も徐々に主流となりつつ　あることがわかる。アジア諸国への留学は、距離が近く渡航にかかる時間が少ないことや、学費や生活費が抑えられるということに加えて、英語以外の外国語の習得が可能となるということが魅力として挙げられる。英語を使用する場合も、英語圏の人々の話す英語よりもハードルが低くなり、英語コミュニケーションを進めやすいという利点もあると考えられる。

数が増えつつあるアジア諸国への留学であるが、実際の留学生は滞在国での生活に馴染み、学びの機会を最大限に活用できているであろうか。日本人の海外留学生の異文化不適応者が、旅行者や駐在員に比べ多いという指摘もみられる（稲村，1980）。現地の人々と深い関わりを持つことのない旅行者や、職場という定められた役割の中で仕事中心の生活を送る駐在員の方が、現地の生活を制御しやすいのかも知れない。留学生は、勉学という目的の遂行を現地のシステムの元で目指しており、加えて現地の人々と交流を行いながら友情関係を築いていくことも期待されている。その関係性構築は言語や文化が異なることで円滑にいかない場合もあろう。ホスト社会の人々と良好な関係を築くことは、社会文化的な側面の異文化適応を促進すると考えられているが（Ward & Kennedy，1994）、日本人留学生を対象としたホスト国での対人関係の形成と異文化適応についての研究報告の多くは、欧米国への留学生が対象である（例えば高濱・田中，2009）。アジア諸国への日本人留学生を対象とした研究は、比較的少ない（例えば高柳・安，2018）。

本研究は、アジア諸国を含む、非英語圏・非欧米国に滞在する留学生の異文化適応研究の意義を認識し、特に台湾への日本人留学生に焦点を当てる。日本から台湾への留学は、2019年度には4,894人（国別集計第8位）にのぼる（文部科学省,2021）。コロナ禍前の2018年度には、前年度比6.4%増加（577人増加）を示していた。日本とは歴史的な繋がりが深く、関係性や隣接する地域という地理的条件からも留学先として注目に値する。しかしながら在台湾日本人留学生の研究は蓄積が浅く、実証的把握と教育的支援の開拓が待たれる。

なお台湾は、親日家も多く日本人にとって近くて親しみ深い「国」であると一般に考えられている。近年のタピオカミルクティーブームも記憶に新しい。但し、日本政府は、台湾を日中国交正常化の際に結ばれた日中共同声明を固辞する立場を取っており、台湾との関係については「国」として認めるものではなく、「非政府間の実務的関係」であるとしている（外務省，1972）。

１－２　学術的背景

異文化圏への環境移行者は、文化行動の異質さに向き合いながら異文化適応の過程をたどることになる。

滞在先にあってはその地の文化行動があり、対人行動の要領も異なるため、ホストとの対人関係形成には認知行動的な学習を要する。異文化圏における対人関係の開始、維持、発展のための要領を、異文化間のソーシャルスキル（社会的技能）とみなすことで、心理教育的セッションによる学習が可能になる（田中,1991）。当該の国や地域におけるソーシャルスキルを身につければ、社会文化的適応の促進、誤解やトラブルの回避、速やかな対人関係形成が期待できる。台湾ではどのようなソーシャルスキルが有用かを留学生の困難体験と対処をもとに探れば、学習試案の手がかりとなると考えられる。

１－３　研究の目的

本研究の目的は、台湾に留学する日本人学生にとって有用なソーシャルスキルについて探索することである。台湾での異文化適応上の困難と対処を調べ、日本人の台湾留学者を対象とした異文化間ソーシャルスキルを抽出してその学習内容の提案を行う。

２．方法

２－１　調査協力者

台湾の国立T大学に留学生した日本人留学生6名を対象として調査を行った。年齢は20歳2名、21歳3名、22歳1名であり、中国語力は、初級（日常会話が困難）2名、中級（日常会話程度）2名、上級（大学の授業についていける）2名であった。上級者の中でDさんは、中国本土の中学校に3年間の滞在歴を持っていた。縁故法により研究協力依頼を行った。調査協力者の属性の一覧を、表1に示す。

表1　調査協力者の一覧

名前	年齢	性別	属性	留学期間	中国語レベル	中国語学習歴
Aさん	21	男	学部生	2018年9月～2019年7月	上級	2年
Bさん	22	男	学部生	2018年9月～2019年7月	中級	1年半
Cさん	21	男	学部生	2018年9月～2019年7月	初級	1年
Dさん	20	女	学部生	2018年9月～2019年7月	上級	3年
Eさん	21	女	学部生	2018年9月～2019年7月	中級	2年半
Fさん	20	女	学部生	2018年9月～2019年7月	初級	1年半

２－２　調査手続き

縁故法によって協力依頼を行い、応じてくれた方に研究の趣旨、内容、倫理的配慮を説明した。2018年9月から11月に、留学振り返りエッセイ（留学の動機、自身の変化、印象的な出来事など）、台湾人との対人行動上の困難と対処に関する自由記述式の質問紙（理解しにくかったことや違和感を覚えたこと、その場面における対応とその結果、推奨する対処方法と理由、ホストと同様に振る舞うのが難しいこと、誤解されたこと、交流の際の心がけなど）、内容確認のためのオンライン面接への協力を得た。

２－３　分析

留学振り返りエッセイと自由記述式質問紙の記載、およびオンライン面接でのその確認をもとに、対人行動上の困難についてKJ法を用いて分析し，カテゴリを抽出した。また困難とその困難に対してどのように対処したのかについて具体例を抽出し、留学生活の進行に伴う変化をみていった。

２－４　学習試案

台湾に留学する日本人学生のための異文化間ソーシャルスキル学習の試案を作成した。

３．結果と考察

３－１　対人行動上の困難のカテゴリ

分析の結果抽出された、在台湾日本人留学生の対人行動上の困難のカテゴリを、表2に示す。1)対人関係、2)社会生活、3)時間感覚、4)主張性の四つの大カテゴリが得られた。

1)対人関係のカテゴリには①接客、②男女関係、③言語の三つの中カテゴリが、2)社会生活のカテゴリには①身だしなみ、②ルールの遵守の二つの中カテゴリが、3)時間感覚のカテゴリには①遅刻、②予定のキャンセルの二つの中カテゴリが、4)主張性のカテゴリには①積極性の一つの中カテゴリが含まれていた。なお、それぞれの中カテゴリには、a、b、cを用いて表した小カテゴリが含まれていた。以下では、中カテゴリごとに、調査協力者から得た情報の概略を紹介する。太字は本人による記述や語りの引用を示す。

表2 在台湾日本人留学生の対人行動上の困難

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ
【1)対人関係】	①接客	a大雑把な対応
		b大変にフレンドリーな対応
		c強力な購入の勧め
	②男女交際	a公共の場でのスキンシップ
		b同性愛の友人との対人関係
	③言語	a中国語での会話スピード
		b他国留学生との英語コミュニケーション
【2)社会生活】	①身だしなみ	a日常的な化粧
		bフォーマルな場での服装
	②ルール遵守	a追い抜きや割込み
【3)時間感覚】	①遅刻	a罪悪感なき遅刻
	②予定のキャンセル	a突然のキャンセル
		b自身の都合を優先
【4)主張性】	①積極性	a日常的な政治の議論
		b自分からの積極的な提案

３－１－１　1)対人関係①接客

一つ目の中カテゴリである①接客については、a大雑把な対応、b大変にフレンドリーな対応、c強力な購入の勧めの三つの小カテゴリが存在する。a大雑把な対応については、BさんとCさんが質問紙の自由記述で挙げていた。以下にBさんによる例を挙げる。

「店員の対応は基本的には大雑把で適当であったし、注文したものと違うものが届くこともあった。話を最後まで聞かずに立ち去ることも。デパートなどでお店を歩いているときによく見かけたのが、お客さんがいないときに店員がケータイを触っていたりご飯を食べている光景だ。」【Bさん】

このBさんの語りからは、日本のようなお客様第一の対応はあまり望めないことが読み取れる。その中でBさんは、日本との対応との違いに驚き戸惑ったが、気にしないように心がけていた。しかし、日本の接客対応に慣れていたために不快に思うこともあったという。

次に、b大変にフレンドリーな対応については、Cさん、Eさんの二人が質問紙の自由記述で挙げていた。ここでは、Eさんの語りの例を挙げる。

「特に飲食店での接客は、「お客様と店員」という感覚よりは、対等な「人間同士」のやり取りに近かった。店員さんがかなり積極的に話しかけてくれるので、仲良くなって他のおいしいお店なども教えてもらうことがよくあった。」【Eさん】

Eさんの語りから、日本ではみられないような積極的な接触があることが読み取れる。店員との関係性を、Eさんは対等な関係であったと捉えている。だがこれに対してBさんは、このような対応の好き嫌いは個人差があると思う、自分はフレンドリーな対応に最初は戸惑ったが、慣れるとこのような対応のほうが好感を持てた、と語っていた。

最後に、c強力な購入の勧めについてはFさんが挙げていた。ここではFさんの語りを例に挙げる。

「洋服などを購入するために店内で商品を見ていると、必ず店員さんが「こちらの商品はいかがですか？」のような声掛けをしてくる。日本では一度「大丈夫です」や、少し迷惑そうな顔をするだけで向こうが察してくれて引き下がるが、台湾では何度も商品を勧めてくる。「買う」というまで引き下がらないこともあった。」【Fさん】

Fさんの語りから、接客がかなり強引で遠慮のない対応であると感じていたことが読み取れる。これについてFさんは、「大丈夫です」と断ってもついてくるのを不快に思ったし、ゆっくり見たい時にもしきりに話しかけてくるのは無礼だと感じたと語っていた。

３－１－２　1)対人関係②男女交際

二つ目の中カテゴリ②男女交際には、a公共の場でのスキンシップ、b同性愛の友人との対人関係、の二つの小カテゴリが含まれている。a公共の場でのスキンシップについてはAさん、Cさんが挙げていた。ここではCさんの語りを例に挙げる。

「電車の中で女性が男性の膝の上に座っていたり、ホームなどで別れ際のキスをしているのを日常的によく見かけた。男女間の距離がとても近いと思った。人目を気にしないんだと思った。」【Cさん】

Cさんの語りから、男女交際に関するとらえ方やスキンシップへのとらえ方は、日本とはかなり違うと感じたことが読み取れる。公共の場であるからスキンシップはしてはいけない、という社会的規範はなさそうだとみている。これについてCさんは、日本では人前でそのような行動をとることは控えるべきだ、という価値観の中で育ってきたので困惑し、電車の中では同じ空間にいるのが恥ずかしかったと語っている。

b同性愛の友人との対人関係については、Dさんが挙げていた。以下にそのDさんの例を挙げる。

「同性愛者であることを恥じることなく公開していたし、周りもそのことについて過剰に反応することはなく、自然に受け入れていた。LGBTに関する授業がいくつも設置されており、国全体として寛容的であると。自分も留学中に一度同性から好意を寄せられた。」【Dさん】

Dさんの語りから、日本では同性愛者であることを隠している人もまだ多く、法の整備も必ずしも進んでいないが、台湾では同性愛に関してより寛容でオープンであると感じたことが読み取れる。性自認に自信を持ち、それを偽ることなく生きていくことは重要であるし、日本でもそのような考え方が広がるべきだと感じたと語っている。しかし、自分が実際に、同性から好意を寄せられたときはどのように対処してよいかわからなかった、とても驚いた、と語っている。

３－１－３　1)対人関係③言語

三つ目の中カテゴリ③言語には、a中国語での会話スピード、b他国留学生との英語コミュニケーションの二つの小カテゴリが含まれる。aの中国語での会話スピードについては、Aさん、Eさんの二人が質問紙と振り返りシートの中で挙げていた。ここではAさんの語りを例に挙げる。

「自分のことを中国語ネイティブであるかのようなスピードで相手が話しかけてくることがあった。当然聞き取ることはできなかったし、急にそのようなスピードで話しかけられたので驚いた。特に部活動などの指示出しや練習メニューの説明などの場面で多かった。」【Aさん】

Aさんの語りから、相手が留学生であるということは考慮されずに、かなり速い速度の中国語を使ってコミュニケーションを取ってくる場合があることが読み取れる。部活動場面において練習メニューなどの指示が上手く聞き取れなかったときは、チームメイトに迷惑をかけたり、上手く連携が取れなかったりしたこともあり、悔しい思いをしたと語っている。

b他国留学生との英語コミュニケーションについては、Cさん、Eさんの二人が質問紙アンケートと振り返りシートの中で挙げていた。ここではEさんの語りの例を挙げる。

「私は日本で中国語は授業で学んでいたが、英語は1年生の時の教養科目で履修した時以来触れていなかったので、欧米圏の留学生と英語でコミュニケーションをとることに非常に苦労した。また、留学当初はみんな中国語のレベルはそこまで高くないので英語でコミュニケーションをとることが多く、もっと英語を学んでおけばよかったと後悔した。」【Eさん】

Eさんの語りから、台湾の共通言語は中国語であるが、留学生同士の会話は中国語レベルに差があるため英語で行われることも多いこと、英語を使用したほうがスムーズにコミュニケーションがとれる場面があった

ことが読み取れる。中国語圏であっても、大学では英語のやりとりが使われることを渡航後に認識している。

３－１－４　2)社会生活①身だしなみ

四つ目の中カテゴリ⑴身だしなみについては、a日々の化粧、bフォーマルな場での服装の二つの小カテゴリが見出された。

a日常的な化粧については、Fさん、Dさんの二人が質問紙の中で挙げていた。ここではDさんの例を挙げる。

「自分は習慣で毎日化粧をして学校に行っていたら、現地の学生に肌に悪いからやめたほうがいいよといわれた。確かに現地の学生で毎日学校に行くために化粧をしている人は、かなり少数であったと思う。」【Dさん】

Dさんの語りから、台湾では日常の化粧はあまりなじみのない習慣であることが読み取れる。また社会習慣の違いから、化粧をしていることを否定的に見る場合があることが分かる。

bフォーマルな場での服装についてはFさんが質問紙で挙げていた。以下ではFさんの語りを例に挙げる。

「現地の学生と少し高級なレストランに行く約束をしており、当日待ち合わせの場所に行くと相手は非常にラフな服装で来ており、レストランの中でも目立ってしまった。デパートなどでもサンダルで来ている人を多く見かけたので、服装に対する意識は薄いんだなと思った。」【Fさん】

Fさんの語りから、台湾では場所に合わせて服装を整える、気を遣うといった意識が日本より希薄なことが読み取れる。さほど人目を気にしていないらしい、と受け止めている。

３－１－５　2)社会生活②ルール遵守

五つ目の中カテゴリ⑵ルール遵守については、a追い抜きや割込みの小カテゴリが含まれる。a追い抜きや割込みについては、Bさんが質問紙で挙げていた。以下ではBさんの語りを例に挙げる。

「夜市の売店や、電車を待つために並んでいるときに、追い抜きや割込みといったことが、そこまで多くないが、日常で見られた。文化の差であるということは理解していても、不快に感じることが多かった。」【Bさん】

Bさんの語りから、追い抜きや割込みなどルールを守らない人に遭遇することが時にあり、日常的であることが伺える。

３－１－６　3)時間感覚①遅刻

六つ目の中カテゴリ⑴遅刻については、小カテゴリのa罪悪感なき遅刻が見出された。

a罪悪感なき遅刻に関する場面については、Bさん、Eさんが振り返りシートと質問紙の中で挙げている。ここではBさんの語りを例に挙げる。

「台湾人はかなり時間にルーズであり、5分10分の遅刻ではなく、30分や1時間といった大幅な遅刻をしてくることもしばしばあった。しかし、その後何事もなかったかのように振る舞われるので、どのような対応をしていいかわからなかった。なぜ遅れたかの理由についての説明や謝罪もほとんどないのも、日本と違うところだろう。」【Bさん】

Bさんの語りから、時間を守るということに関して、日本人ととらえ方が大きく異なるということが読み取れる。遅れた理由についての説明がないことも、特徴の一つとして理解している。

３－１－７　3)時間感覚②予定のキャンセル

七つ目の中カテゴリ⑵予定のキャンセルには、a突然のキャンセル、b自身の都合を優先の二つの小カテゴリが含まれる。a突然のキャンセルについては、Fさんが質問紙で挙げていた。以下ではFさんの語りを例に挙げる。

「楽しみにしていた予定であったのに、当日にいきなり行けなくなったという連絡だけが来て、謝罪なども特になかった。こちらがその日連絡をしても相手が応じることはなく、相手の行動が理解できず腹が立った。」【Fさん】

Fさんの語りから、当日突然のキャンセルであっても理由の説明や謝罪などがなく、キャンセルを行うことに日本人にみられるような後ろめたい気持ちがなかった、という受け止め方をしていることが分かる。その日は連絡が取れなかったということにも、認識や習慣の差の反映をみて憤慨している。

b自身の都合を優先については、Dさん、Fさんが振り返りシートと質問紙の中で挙げていた。ここではDさんの語りを例に挙げる。

「部活動のミーティングがある日に、彼氏とけんかしてしまったため参加できないという部員がいた。私の感覚では、私情よりも部活動の予定を優先させることが当たり前であるが、台湾の部活ではある程度それが許される空気があった。プライベートの約束をした場面でも、自分の都合を優先して時間が変更されたり、日にちが変更されたりすることもあった。個人主義と集団主義の違いなのかなと思った。」【Dさん】

Dさんは、個人の事情を優先させても許されるという文化的規範を感じとっている。プライベートの約束なども自身の都合を優先させて、相手にそれに合わせてもらう傾向があると述べている。

３－１－８　4)主張性①積極性

最後の中カテゴリ⑴積極性については、a日常的な政治の議論、b自分からの積極的な提案、二つの小カテゴリが含まれる。a日常的な政治の議論のことは、Cさんが質問紙の中で挙げていた。以下ではCさんの語りを例に挙げる。

「飲食店などのテレビに政治に関するニュースが流れた時に、若い人から高齢者までみんながテレビにくぎ付けになっていた。また、選挙が近くなると特に、政治についての話題が日常会話の中で上がる機会が多くなった。学生が立候補者の演説会や当選パーティーに参加することもよくあり、日本の学生との政治への関心度の違いに非常に驚いた。」【Cさん】

Cさんの語りから、台湾人は政治への関心が日本よりかなり高く、積極的に政治に参加する姿勢が多くの人に見られることが読み取れる。その姿勢に年齢は関係なく、学生のうちから熱心に政治に参加しているという。

b自分からの積極的な提案については、Cさん、Dさんが振り返りシートと質問紙の中で挙げていた。ここではCさんの語りを例に挙げる。

「現地の学生とある観光地に出かけることになった時に、どこに行きたいか、何がしたいか、何を食べたいかということを聞かれた。その際「なんでもいいよ。」や「あなたに任せます。」という返答をしていたら、本当は行きたくないのではという風に勘違いをされ、相手を不快に思わせてしまった。」【Cさん】

Cさんの語りから、遠慮をしたつもりで選択を相手に任せたが、それを相手は行きたくないという風にとらえてしまい、解釈の齟齬が生まれて相手を不快にさせてしまったという、誤解の流れが読み取れる。

３－２　困難への対処行動と結果

以上の困難事例に対して、調査協力者がそれぞれ取った行動とその結果について、小カテゴリごとに説明する。

３－２－１　「1)①a 大雑把な対応」に関する対処行動と結果

Bさんは、必要なことは詳しく説明したり、自分に必要なものをはっきりと相手に伝えるようにした。そうすることで、店員の対応は依然大雑把であったが、理解はしてくれて、必要なものは用意してくれた。また、Cさんは、当初、商品がなかなか出てこない時などに、相手に早くしてほしいなどの要望を伝えるのは失礼だと思っていたが、主張しなければ相手は対応をしてくれないということが分かり、急いでいることなどを伝えるようにしたところ、自分の要望に沿った対応をしてくれるようになった。

３－２－２　「1)①b 大変にフレンドリーな対応」に関する対処行動と結果

Cさんは、台湾ではフレンドリーな接客が好まれるということを現地の学生から教えてもらい、自分も中国語を使い、出来るだけフレンドリーに対応するよう心掛けた。そうすることで定員さんとも仲良くなることができ、割引なども受けられるようになり、そのお店に行くのが楽しみになった。また、Eさんは、台湾人定員のフレンドリーな対応に好感が持てたということもあり、日本ではあまりしてこなかった店員さんと積極的に話をするという行動を取るようになった。台湾人の店員からは、台湾文化について等、様々な情報を教えてもらうことができた。

３－２－３　「1)①c 強力な購入の勧め」に関する対処行動と結果

Fさんは、店員に対して、「大丈夫です」のような控えめな断り方では、相手が引き下がらないことが分か

り、理由を付けて断ったり、少し強い言葉で断ったりしたところ、相手も自分の要望を理解し、干渉してくることをやめる場合が多くなった。

３－２－４　「1)②a 公共の場でのスキンシップ」に関する対処行動と結果

Aさんは、基本的には気にしないようにし、目をそらすなどの行動を取り、自分が不快感を覚える場合は、その場から立ち去るなど、相手に干渉しないという対応を取った。しかし、台湾では日常的によく見かける光景であるため、生活しているうちに自然と受け入れられるようになった。一方でCさんは、日本ではあまり見かけない光景であるため、ずっと相手の方を見ていたら、相手に怒られるという経験をした。そのため、Aさんと同様に、自分が立ち去る等、相手への干渉を避ける対応を取ることで、トラブルを避けることができるのではないかと考えていた。

３－２－５　「1)②b 同性愛の友人との対人関係」に関する対処行動と結果

Dさんは、台湾の同性愛についての考え方や接し方に賛同することができたので、相手が同性愛者であるかどうかということを気にせずに、対人関係を形成していった。同性に好意を寄せられた時は、初めてのことであり驚いたが、自分は同性を恋愛の対象として見ることができないことを説明した。その結果、相手も理解してくれ、以後も友好的な関係を続けることができた。

３－２－６　「1)③a 中国語での会話スピード」に関する対処行動と結果

Aさんは、相手の会話速度が速く聞き取れない場合は、自分はまだ中国語にそこまで慣れていないからもう少しゆっくり話してほしい、という要望を伝えた。相手も配慮して、比較的ゆっくりしたスピードで話してくれるようになった。次に、Eさんは、相手の中国語が聞き取れなかった場合は、どの部分は理解できて、どの部分が理解できなかったのかを伝えるようにした。そうすることで、自分が相手の話を聞いていることが伝わり、相手からも理解できている部分を重複して話してもらわなくて済み、相手の負担も減らすことができた。

３－２－７　「1)③b 他国留学生との英語コミュニケーション」に関する対処行動と結果

Cさんは、留学を開始した当初は中国語をほとんど話すことが出来なかったので、他国の留学生とは英語で話すことが多かった。英語に自信があったわけではなかったが、会話を楽しむことが中心で言語レベルの差は気にならなった。時間が経って中国語が身に付いてくると、英語と中国語を使う比率は逆転していった。一方でEさんは、自身の英語のレベルが高くないため、他国の留学生との会話が英語で始まった時には、あまり会話に入らないようにした。自分が分かっていないということが相手に伝わらないように、表情を作り、その会話が終わるのを待つこともしばしばあった。欧米圏の留学生とは英語の壁があり、うまく馴染むことができなかった。

３－２－８　「2)①a 日常的な化粧」に関する対処行動と結果

Dさんは、現地の学生から化粧についてしない方が良いと指摘された時に、日本では化粧をすることが一般的であると、自国の文化について説明を行った。その結果、相手から化粧をして来ることについてそれ以上言及されることはなくなった。そして、日本風のメイクを教えてほしいと頼まれ、距離を縮めることにつながった。日常的な化粧に関して、Fさんは、台湾では学校に行く際、化粧をしたり髪をセットして行かなくても目立つことはなく、むしろ気が楽で居心地がいいと感じたため、次第に化粧をしなくなった。そうすることで、朝の時間に余裕が持てるようになったし、あまり人目も気にならなくなった。

３－２－９　「2)①b フォーマルな場での服装」に関する対処行動と結果

Fさんは、台湾人の友人に対して、TPOに合った服装をしてほしいと伝えてみた。しかし、その後も彼女の行動が変わることはなかった。個人差はあるが、台湾人は服装に関するこだわりや意識は、日本人に比べて薄いということへの理解が生じていった。

３－２－10　「2)②a 追い抜きや割込み」に関する対処行動と結果

Bさんは、追い抜きや割込みをされた際には、当初は我慢していた。だが中国語も身に付いて台湾生活に慣れてきた頃、勇気を持って声をかけてみたところ、きちんと列に並んでくれたという。この経験から、不快に思った場合などは、相手に伝えるようにした。すると多くの場合は、相手が理解し、ルールを守ってくれるようになった。

３－２－11 「3)①a 罪悪感なき遅刻」に関する対処行動と結果

Bさんは、1時間などの大幅な遅刻をしてきた後でも、何事もなかったかのように振る舞われることに対して最初は戸惑った。しかし、日本のように時間厳守の文化ではないことが分かってからは、どうしても遅れてほしくない場合は、事前にそのことを伝えたり、早めに集合時間を伝えたりした。そうすることで、相手が遅刻してくることはほとんどなくなった。Eさんは、大学の教授も授業の時間に遅れてくることが多々あることに最初は驚いた。また、相手の遅刻のせいで自分が電車などに遅れてしまった時には、腹を立てることもあった。しかし、時間の捉え方も文化によって差があることを認識してからは、待ち合わせの前や待ち合せの当日に確認の連絡を取るということを実践した。その結果、相手が遅れてくることは少なくなった。

３－２－12 「3)②a 突然のキャンセル」に関する対処行動と結果

Fさんは、当日になって突然のキャンセルをしてきた相手に対し、なぜ突然キャンセルしたのか理由を尋ねたが、尋ねるという行動には意味がないことを、時間が経つにつれて理解した。相手は約束自体をそれほど重大な出来事として捉えていないことに気づき、自分の認識を改めることが最も良い方法であると思うようになった。

３－２－13 「3)②b 自身の都合を優先」に関する対処行動と結果

Dさんは、部活動の場面で、私情を優先することが許されることを知った時には、日本の部活動の厳しさと大きくことなることに気づき、ショックを受けた。この経験の後は、自分が相手に気を遣って合わせることは、以前より少なくなっていった。自分の方が、自分の都合を優先して予定などをキャンセルした場合でも、相手から文句を言われることはないということも体験した。

３－２－14 「4)①a 日常的な政治の議論」に関する対処行動と結果

Cさんは、自分自身が台湾の政治や中国との関係について、あまり詳しいわけではなかったので、自分から積極的な発言をすることは控えた。自分は詳しくはないのだが、という前置きをしてから自身の意見を述べるようにした。すると、自分の発言した内容が間違っていても訂正してくれるようになり、自分の勉強にもなった。相手の反応も、自分が何も発言しない時よりも良くなった。

３－２－15 「4)①b 自分からの積極的な提案」に関する対処行動と結果

Cさんは、自分の消極的な態度が相手に不快感を与えてしまっていることに気づいてから、自分でも下調べをし、自分の意見を表明するようにした。すると、相手に誤解を与えることがなくなったばかりでなく、参加したイベントをもっと楽しめるようにもなった。なおDさんは、ある台湾人学生とよく出かけたり、ご飯を食べたりしていた。自分から提案することを遠慮して相手の提案に合わせていたところ、相手から、どうして提案してくれないのか、自分と一緒に過ごすのは楽しくないのかと言われた。その時、自分から提案しないことは相手に関心がないと受け取られてしまうことを理解した。その後は、自分から様々な提案をするようになった。その結果、相手との仲が一層良好になった。

３－３　時間的変化

留学のふり返りをみると、当初は言葉と文化の違いに戸惑いながらも、言語習得に励み、台湾人と交流し、文化行動の理解と実践が進んで次第に現地の文化に馴染んでいったことがうかがえる。5名は言語の壁があったと述べていたが、毎日中国語を使用するうち、約1か月が経過する頃には気にならなくなったとしていた。しかし、日本との文化差による困難は言語の問題よりも長引いており、対人関係に関する誤解やトラブルが、留学終了まで解決しなかったと語る人もいた。

４．総合考察

４－１　台湾留学における対人行動上の困難の内容

得られた困難のカテゴリのうち、外国語使用に伴う困難は留学生に一般的なものと推測されるが、そこに台湾人による外国人への態度や英語の媒介言語としての通用性という、社会的な状況が重なっている。接客や男女の交流、身だしなみや社会規範、時間感覚や約束遵守は総じて日本より寛容であると受け止められている。そこに当初は不快や違和感を覚えることがあるが、現地での考え方を理解すると抵抗が薄れ、自分もその行動を取り入れて快適さを感じるようになっていく様子がみられる。そして積極的な議論や提案といった対話における主体性や主張性を取り入れることは、関係形成を前進させる力にもなっている。社会文化的文脈に即した考え方、感じ方と行動の仕方は、彼らの異文化適応を後押ししているようである。台湾で留学生として生活するには、およそのところでこれらの困難への対処方略を用意しておけば、対人関係の形成・維持・発展がしやすくなるだろうと思われる。誤解やトラブルを避け、充実した交流を紡いでいけるようになることが期待される。こうした要領をソーシャルスキルの形で提供できれば、学習が可能になり、台湾における異文化適応のためのソーシャルスキル学習につなげていくことができる。

言語能力との関係については、以下が読み取れる。語学力が原因となる困難は、言語の壁を感じると語った調査協力者5名全員が、約1か月経過する頃には気にならなくなったとしている。時間経過による解決が望めるらしいことが示唆される。この5名は、中国語を毎日使っていくうち、最初の1か月が過ぎたころには自ずと現地の言語環境に馴染んだと振り返っている。しかし、日本との文化差の問題の克服が、言語の問題より時間を要したことは興味深い。対人関係に関する誤解やトラブルといった困難が、留学終了まで解決しなかったという語りは、日本人学生による台湾での異文化適応が容易でも自動的なものでもなく、努力と時間のいるものであることを示している。Dさんは、中学校3年間は中国に滞在していたため、留学当初から言語の壁をほとんど感じなかったと語っていた。しかし、文化差やそれに伴う対人関係については、他の5名と同じような困難に遭遇していたことは注目に値する。語学力は問題解決の手助けにはなるが、文化的な差や対人関係形成における問題を回避することと同一視はできない、ということがわかる。

今回の協力者においては、外国語は時間がたてば慣れるが、文化差への対処はより長引いていた。だが当初違和感を覚えた社会的行動も、観察したり教えてもらったりして理解し、自分も実践して反応を得るようになると納得もし、むしろ快適に感じるようになり、さらに活用して関係形成を推進していく。認知行動的に異文化間ソーシャルスキルを会得して、異文化適応を果たしていく様子がみて取れる。今回みてきた困難は、日本人留学生にとって、台湾での学生生活の中で対処を要する社会的場面を反映している。

他の文化圏における異文化間ソーシャルスキルの研究と対比してみる。アメリカでは、在米日本人留学生のソーシャルスキルとして、主張性が重視されている（田中,1994）。今回の結果をみると、台湾でも日本よりは主張の要求水準は高いようである。反対に、在日留学生のソーシャルスキル研究では、日本的なソーシャルスキルとして間接表現や察しが挙げられている（田中,1991）。日本における表現の抑制は、台湾における表出性への期待とは対称的であり、表裏の関係がみて取れる。なお在ブラジル日本人のソーシャルスキル（迫・田中,2018）では，対人的スキルに加えて社会生活スキルとして、治安や子育て関連の対策が挙げられていた。これらは当該社会の環境と社会生活の実情を反映したものと考えられる。対人関係に社会生活を加えた対応策は、広義のソーシャルスキルといえるだろう。

４－２　日本人留学生のための台湾留学ソーシャルスキル学習の提案

最後に、対処の要領からソーシャルスキルを抽出して学習試案を組み立て、異文化適応の支援策として提案する応用段階を考えてみたい。今回描き出された在台湾日本人留学生の対人関係上の困難と、それらへの対処行動と時間的変化に関する結果を基にすれば、学習試案を作成することができる。実際にソーシャルスキル学習のセッションを構成する場合は、現実に遭遇しそうな場面を想定してロールプレイ方式で繰り返し対応を練習する。学習者は肯定的フィードバックを得て、文化的価値観と文化行動パターンの解説を聞き、期待される行動と効果的な対応の要領を学ぶ。こうして各場面で対応する時の考え方や判断の仕方、表現の仕方が、具体的な認知と行動として学習されていく。

以下ではその学習試案を紹介し、参考までに、その場面において有効と思われる中国語のフレーズの例も適宜紹介する。実際に使えそうな中国語を挙げるが、これらはあくまで一つの例であり、絶対的な表現では

ない。他にも有用な表現方法はたくさん存在するだろう。

1)遅刻場面に有効なソーシャルスキル：「事前確認・連絡」
台湾人は待ち合わせなどの時間に関する捉え方が日本人と大きく異なっているとの認識が、今回の日本人留学生においてみられた。時間を約束しても、1時間にも及ぶ大幅な遅刻をすることもあるという。相手に遅刻をしてほしくない場合は、事前の連絡、待ち合わせ時間の確認を行うことが、行き違いを防ぐ役に立つ。
この場面において実際に使うことのできる中国語の一例を紹介する。
日本語：今日の待ち合わせ時間は12時ですよね？
中国語：今天我們約好的時間是12點吧？

2)政治の話をする場面に有効なソーシャルスキル：「不用意な発言を控える」
台湾では若い人も政治への参加意識が高く、日常でもしばしば政治の話が話題に上る。その時に自分も会話に参加するなら、中国との関係を語る時は十分な注意と配慮が必要である。正しい知識に自信がない場合は、相手に教えてもらうという立場をとれば、誤解を招く発言をしてしまうことを避けることができる。なお、発言を求められた場合に何も答えないと、相手から失礼だと捉えられることもあるため、よくわからない場合は、自分は詳しくないということを相手に伝えてから意見を述べることが勧められる。

3)初対面の会話場面に有効なソーシャルスキル：「台湾の基本的情報の予習」
初対面の会話場面では、台湾の文化や社会背景に関する知識を身に着けておくことにより、会話が盛り上がり相手との距離を縮めやすくなる。台湾のことをよく調べているという、好印象を相手に与えることもできる。

4)中国語での会話場面に有効なソーシャルスキル：「聞き返し・言い換え」
中国語での会話場面では、聞き取れないときや上手く伝えられない場面でも、ごまかすことなく相手に聞き返す、知っている単語で言い換えるなどの努力をすることが大切である。また、中国語で話すことに集中しすぎると、表情が暗くなって、相手に与える印象が悪くなることがある。それを避けるために、心がけて明るい表情で話すことも重要である。
この場面において、実際に使うことのできる中国語の一例を紹介する。
日本語：今言ったことが聞き取れなかったので、もう一度言ってもらえますか？
中国語：剛才沒聽懂、你能不能再說一次？

5)同性愛や公共の場でのスキンシップ場面に有効なソーシャルスキル：「交際に関する意識の差についての理解と受容」
台湾は性の在り方に関して、日本よりも多様性を認める傾向のある文化であり、同性愛についてもより寛容に受け入れていると考えられる。多様な相手を否定するのではなく、多様性を想定内として受け入れる必要がある。もし自分が異性愛者であっても同性から好意を寄せられたというような場合は、自分の気持ちを正直に伝えることで相手と理解しあえる努力をすることが勧められる。

6)強引な接客に遭遇した時に有効なソーシャルスキル:「明確な意思表示」
台湾の接客は日本の接客とは異なり、かなり強引に感じられる場合もある。その時には、はっきりと買うつもりはありません、見ているだけなので大丈夫です、などのように伝える必要がある。そう伝えない限り、強引に商品を勧め続ける可能性もあるので注意が必要である。
この場面において実際に使うことのできる中国語の一例を紹介する。
日本語：見ているだけです。
中国語：我只隨便看看。
日本語：必要ないです、ありがとう。
中国語：不用了、謝謝。

7)相手から遊びや食事に誘われた場面に有効なソーシャルスキル：「積極的な提案」
　場所や内容、時間などすべてを相手に任せることは、自分が消極的で提案を歓迎していないととらえられることがあるため、自分からも提案をすることが重要である。そうすることで相手に、その人との時間を楽しんでいるということを伝えられる。
　この場面において実際に使うことのできる中国語の一例を紹介する。
日本語：〇〇はどうですか？〇〇がしたいです。
中国語：你覺得〇〇怎麼樣？ 我想〇〇。

8)相手の名前を呼びかけたり、自分の名前を名乗る場面に有効なソーシャルスキル：「正しい名前の呼びかけ」
　台湾人はあいさつなどの場面で必ずといっていいほど名前を呼ぶ。気持ちよく挨拶を交わすには、相手の名前を正しく覚えて、それを口にすることが重要である。なお、自分の名前を名乗る時も中国語発音ではなく日本語発音の名前を名乗ったほうが、反応もしやすく親しみを持ちやすい。

9)英語での会話場面に有効なソーシャルスキル：「会話への能動的な参加」
　留学当初は学生間で中国語のレベルに差があり、コミュニケーションを英語で取る機会も多い。そのため英語を母国語として話す欧米圏の学生とは特に、コミュニケーションを英語で取る場面にしばしば遭遇する。彼らは総じて積極的な会話への参加を好むため、知っている単語や知識を使って会話に参加することが、良好な対人関係を構築することにつながる。

10)服装意識の差による問題遭遇場面に有効なソーシャルスキル：「身だしなみ意識の差についての認知」
　台湾人は、個人差はあるが日本人に比べて、自身の身だしなみについて無頓着なことがあるようである。服装を整えてフォーマルな場に出かけたい時などは事前に伝える、ということをすればある程度気を遣ってくれるが、基本的にはラフな服装が多いということを認識しておく。そうすれば一方的な期待とのギャップからくる服装についてのトラブルを避けることができる。

11)ルール違反遭遇場面に有効なソーシャルスキル：「中国語での注意・呼びかけ」
　台湾では、高頻度ではないが追い抜きや割込みなどのルール違反をする人に遭遇することがある。不快に感じた場合などは、声をかける、注意をするなどを行えば、基本的には相手が理解を示して謝罪し、ルールに則った行動をとることも期待できるようである。こうした時は中国語で声をかければ、英語ができない人にも対話を試みられるので、説得力が上がって、依頼の趣旨が伝わりやすい。
　この場面において実際に使うことのできる中国語の一例を紹介する。
日本語：追い抜かないでください。
中国語：請不要插隊。
日本語：列に並んでください。
中国語：請排隊。

12)日本人留学生同士の関わり方に有効なソーシャルスキル：「適度な依存と距離感」
　台湾に来る留学生の中で最も多いのは日本人留学生である。そのため日本人留学生とのかかわりは、台湾での留学生活の中で必然的に発生するものである。同国の出身者は異文化の下では、困難の解決や精神の安定に最も大きな手助けをしてくれる存在であるが、そのコミュニティの中を自分の主たる生活範囲としてしまうと、居心地は良くとも外国滞在を経験する留学の意義が薄れてしまうことにもなりかねない。しかし、同朋との関係を完全に断ち切るのはかえって他のトラブルを誘発する可能性もある。適度な依存と距離感を保つことで有意義な留学生活を送り易くなり、帰国後も様々な情報交換をしあえる良い関係であり続けることが期待できる。

　日本人留学生が台湾で留学生活を送る中で、社会的場面で感じた対人行動上の困難をもとに台湾留学のソーシャルスキルを考案して、その対処をもとに対応例を示したソーシャルスキル学習の試案をみてきた。上

記12個の場面にそれぞれ有効なソーシャルスキルを、台湾留学出発前に練習できれば、渡航後の問題解決に使うことができる。それは遭遇する困難を減らし、現地での生活におけるよりスムーズな異文化適応に繋がるものと期待される。

今回抽出したスキルをみると、開放的で積極的で親しみ深く、寛容な対人関係の持ち方の要領が浮かび上がる。日本人留学生が出会った困難は、中国文化として歴史的に論じられてきた価値観を背景にした伝統的な規範に関するものとは趣を異にするように思われる。むしろ日本との文化的な近しさを持ちながらも異質さを内包する近代的な東アジアの隣国で、同世代の大学生や大都市の構成員とふれあう際に出会う、台湾の日常生活の中の社会文化的文脈がみえてくる。これが実際の留学生が出会う現実の台湾だったといってもよいだろう。古典的な意味の文化を知るだけで今日の対人関係が築けるわけではなく、現実の対人関係の作り方をみていくことが、現代に生きる人間の異文化適応には不可欠である。留学支援を念頭にスキル学習を組み立てる場合は，文化的特異性のどこに注目するのかについて、滞在者の環境と滞在スタイルに対応させながら、学習者のニーズを基準に考えていく必要があることを強調しておきたい。

残された課題として、実際にそれぞれの場面で日本人留学生の取った行動の検証の問題がある。それらについて現地の学生に評価をしてもらい、その行動が最良であったか、他にもっと良い解決行動があったかどうかを探る必要がある。そうすることで、日本人の経験だけではなく台湾人の評価や提案も加わった、より良いソーシャルスキルの提案が可能になると考えられる。なお、中国本土の元在日中国人留学生に関しては、日本で身につけた文化行動を帰国後も維持する例が報告されている（Okunishi&Tanaka,2020）。今後の課題の一つとして、台湾留学を終えた後の日本人留学生の追跡調査が考えられる。台湾留学後での生活習慣や時間感覚が、どのように帰国後の生活に影響を与えているのかは興味深い問いになるだろう。

引用文献

外務省（1972）日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc_seimei.html （2021年10月閲覧）

稲村博（1980）日本人の海外不適応　日本放送出版協会

文部科学省(2021)「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数等」について
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692。htm）2021（2021年7月閲覧）

日本学生支援機構（2021）2019（令和元）年度日本人学生留学状況調査結果
https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/03/date2019n.pdf （2021年10月閲覧）

Okunishi, Y. & Tanaka, T. (2020) Re-acculturation of Chinese Returnees after Study in Japan *Japanese Journal of Applied Psychology vol.46 (Special edition)*, 11-18.

迫こゆり・田中共子（2018）在ブラジル日本人における異文化滞在のソーシャルスキルの検討―社会生活スキルと対人スキルの観点から　多文化関係学15, 3-17.

高濱愛・田中共子（2009）アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習の試み：アサーションに焦点を当てて　異文化間教育30, 104-110.

高柳有希・安龍洙（2018）日本人学生の韓国留学観の変化に関する一考察　茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究2, 91-102.

田中共子（1991）在日留学生の文化適応とソーシャル・スキル　異文化間教育5, 98-110.

田中共子（1994）アメリカ留学ソーシャルスキル　通じる前向き会話術 アルク

Ward, C. & Kennedy, A. (1994) Acculturation strategies, psychological adjustment, and sociocultural competence during cross-cultural transitios. *International Journal of Intercultural Relations*, 18, 329-343.

Interpersonal Behavioral Difficulties and Cross-Cultural Adaptation of Japanese International Students in Taiwan: Investigation of Social Skills Learning

Yuri Okunishi, Tomoko Tanaka*, Jun Murakami**

Department of Secondary Education, Faculty of Education、
Okayama University of Science
**Graduate School of Humanities and Social Sciences*
Okayama University
***Recruit Co., Ltd.*
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama 700-0005, Japan
3-1-1 Tsushimanaka, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama 700-8530, Japan

(Received October 31, 2021; accepted December 9, 2021)

Abstract Cross-cultural adaptation of Japanese international students in Taiwan was investigated. Six Japanese students joined the survey. Four categories of interpersonal behavioral difficulties were found: interpersonal relationships, social life, sense of time and assertiveness. The examples of social skills learning were discussed.

Keywords: cross-cultural social skills; Japanese international students in Taiwan